

中国からもたらされた「山水画」は、画家の胸中にある理想的な風景を描いた作品と定義づけられています。日本においても古くから描かれ、近代では明治末から大正にかけて南画が再評価されたことにより、多くの山水画の名品が生まれました。その中でも、小杉放菴（1881-1964）は日本画の制作に軸足を移して以降、精力的に山水画を手がけるようになり、48歳頃に麻紙を用いたことを機に、墨のにじみを活かした独自の山水画を創り上げました。

時が下り、現代では「山水画」というよりも、山水の「思想」に共鳴し描く画家が多いと言えます。その代表的存在として、長年居を構える茅ヶ崎や、故郷である日光の風景を描くことによって「自分の風景」を追い求める洋画家・入江 観（1935-）や、水やアクリル絵具を用いて、あらゆる人々の感覚を呼び覚ます絵画を創る間島秀徳（1960-）が挙げられます。年代・制作方法・描く対象ともに異なる2人ですが、山水の思想をもとに制作していることに共通点を見出せます。

本展は、小杉放菴や大山魯牛（1902-1995）らによる近代の山水画から、現代における山水の思想が息づく作品を紹介することにより、山水の系譜をたどるものです。さらには、山水ということばや、画中に描かれた人物にも着目し、画面に込められた意味により深く迫ります。

■ 開催概要 ※新型コロナウイルス感染症の状況により、会期等が変更になる場合があります。

会期：2022年1月29日（土）～4月3日（日）

休館日：毎週月曜日（ただし3月21日は開館）、3月22日（火）

開館時間：9時30分～17時（入館は16時30分まで）

入館料：一般730（650）円、大学生510（460）円、高校生以下は無料

※（ ）内は20名以上の団体割引料金

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、日光市公共施設使用料免除カードの交付を受けた方とその付き添いの方1名は無料

※第3日曜日「家庭の日」（2月20日、3月20日）は、大学生は無料

主催：公益財団法人小杉放菴記念日光美術館、日光市、日光市教育委員会

■ 本展の4つの見どころ

1 筆使いや色から山水に迫る！

麻紙と出会ったことで枯淡な山水画を創り上げた小杉放菴（1881-1964）や、生涯南画を描き続けた大山魯牛（1902-1995）など、独自の画境を切り拓いた近代の画家たちによる山水画をならべ、描かれた風景をはじめ、筆致や色使いなど、多角的な視点から山水画をご紹介します。

2 山水のことばの意味に迫る！

山水画のイメージから、幽玄な風景を想起させる「山水」ということばは、明治から大正にかけて、今日の「風景」と同じ意味を有していました。放菴が学んだ画塾・^{ふどうしゃ}不同舎の画家たちが手がけた「^{どうろさんすい}道路山水」には、何の変哲のない風景が描かれていますが、実はこれらの作品は、今日の「風景画」の先駆的存在とも言えるのです。「道路山水」を起点に、山水ということばの意味と今日の風景画との関わりについて探ります。

3 人物から「山水」に迫る！

一見難解な山水画ですが、漁師・木こり・農夫などの画中に描かれた人物は、絵を読み解くヒントを与えてくれます。平凡とも言えるこれらの人物には、戦乱や厳しい身分制度の中で生きねばならなかった古代中国人が憧れた「^{いんいつ}隠逸」の意味が込められています。

幼い頃から漢学に親しみ、後に漢学の勉強会・^{ろうそうかい}老荘会を主宰するなど、生涯を通して漢学の素養を培い続けた放菴にとっても、これらのモチーフは頻繁に描かれたものでした。壮年期は日本美術院の脱退や、春陽会の設立、東京大学安田講堂の壁画制作と慌ただしい日々を過ごし、空襲でアトリエを焼け出され、晩年は新潟・妙高高原で過ごした放菴の人生は、乱世を生きた古代中国人と重なり合うようにも見えます。

漁師や木こりなどのほか、老子や陶淵明像なども取り上げることで、山水画に込められた意味により深く迫ります。

4 山水の「いま」に迫る！

今日では「山水画」というよりも、山水の「思想」に共鳴し描く画家が多いと言えます。本展では、長年居を構える茅ヶ崎や故郷・日光の風景を描く洋画家・入江観（1935-）と、水やアクリル絵具などを用い、あらゆる人々の感覚を呼び覚ます絵画を創り続ける「超・日本画家」間島秀徳（1960-）の2人に焦点を当て、山水の「いま」に迫ります。



■ 広報用画像

※申込方法など詳細は、5頁をご参照ください。



①



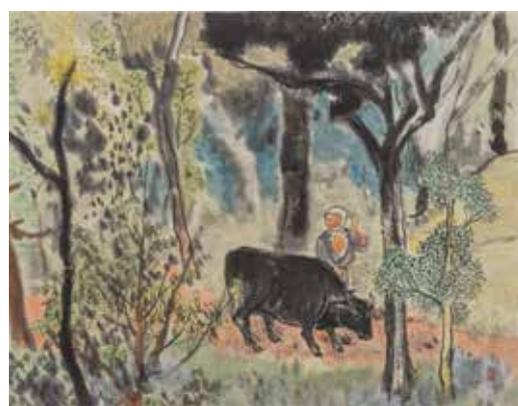
②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

①大山魯牛《山水（牧豚）》1927（昭和2）年

②小杉放菴《漁樵問答》1950-60年代

③小杉未醒（放菴）《雨》1920年頃

④小杉放庵《漁村夕陽》1930年代前半

⑤大山魯牛《牛と農夫》制作年不詳

⑥吉田博《杉並木》1894-99（明治27-32）年頃

⑦入江観《双稜冠雪》2012（平成24）年

⑧間島秀徳《Kinesis No.407(Bakufu Un)》2009（平成21）年
作品は全て小杉放菴記念日光美術館蔵

■ 会期中のイベント

・担当学芸員によるギャラリートーク（予約不要・要入館料）

2月5日（土）、2月27日（日）、3月19日（土）

各日 11時～（1時間程度）

■ 次回展予告

風景を見る眼 ―国立公園絵画展―

2022年4月9日（土）～7月3日（日）

■ お問い合わせ先

小杉放菴記念日光美術館

〒321-1431 栃木県日光市山内 2388-3

Tel: 0288-50-1200 Fax: 0288-50-120

担当学芸員：清水友美

E-mail: shimizu-tomomi ■ khmoan.jp

（■は@に置き換えてください）

「山水百景」展 広報用画像申込書

FAX: 0288-50-1201 E-mail: shimizu-tomomi ■ khmoan.jp

小杉放菴記念日光美術館 清水行

■ 画像使用に際してのお願い

- ご希望の図版の左枠内に☑を入れて、FAXかメールにてお送りください。
(リリース中の図版に付された1～8が、図版番号です)
- 使用目的は、本展のご紹介のみに限ります。
- 画像は、原則、全図でご使用ください。トリミング、部分使用、文字のせは無断で行なわないよう、お願いいたします。
- 掲載する場合は、各画像のキャプションを必ず記載してください。
- 画像のご使用は1申込につき1回とし、使用後のデータは破棄してください。
- 基本情報確認のため、展覧会担当まで必ず校正紙をお送りください。
- 掲載見本を展覧会担当までご送付いただきますよう、お願いいたします。

☑	No	キャプション
	1	大山魯牛《山水(牧豚)》1927(昭和2)年、小杉放菴記念日光美術館蔵
	2	小杉放菴《漁樵問答》1950-60年代、小杉放菴記念日光美術館蔵
	3	小杉未醒(放菴)《雨》1920年頃、小杉放菴記念日光美術館蔵
	4	小杉放庵《漁村夕陽》1930年代前半、小杉放菴記念日光美術館蔵
	5	大山魯牛《牛と農夫》制作年不詳、小杉放菴記念日光美術館蔵
	6	吉田博《杉並木》1894-99(明治27-32)年頃、小杉放菴記念日光美術館蔵
	7	入江観《双稜冠雪》2012(平成24)年、小杉放菴記念日光美術館蔵
	8	間島秀徳《Kinesis No.407(Bakufu Un)》2009年、小杉放菴記念日光美術館蔵

貴社名:

媒体名:

ご担当者名:

TEL:

FAX:

E-mail:
